

## 令和6年度 新規指定（国指定文化財）

### かくけじゅうたく 郭家住宅

- 1 種別（区分） 有形文化財（建造物）
- 2 名称（員数） 郭家住宅 10 棟  
洋館、診察棟、座敷、離れ、米蔵、東土蔵、南土蔵、風呂、外便所、  
表門及び石塀 土地  
附指定：建築関係資料 29 点
- 3 所有者 個人
- 4 所在の場所 和歌山市今福 1 丁目 135 番 3
- 5 指定年月日 令和 6 年 8 月 15 日

#### （説 明）

郭家住宅は、和歌山市今福に所在する住宅で、かつて「郭医院」として営まれた擬洋風建築である洋館を始めとした建造物群である。広い屋敷には江戸時代末期から大正時代にかけて建設された建造物が残されている。

郭家は清朝の侍医であったが、国乱を逃れて長崎に居住し医業に従事したとされる。三代目の代で和歌山に移り同じく医業に就き、四代目より紀州藩の藩医となり以降代々藩医を務めた。七代目郭百輔<sup>ひゃくすけ</sup>は西洋医学を学び、明治時代になると、明治 7 年（1874）には和歌山県より和歌山医学校兼小病院の設立議員に任命され病院の建設に尽力した。そして同じ頃百輔は民間医院として、明治 10 年（1877）にこの郭医院を開業した。以降八代目郭嘉四郎<sup>かしろう</sup>が昭和 3 年（1928）に没するまで、当住宅において医業が営まれた。

郭家住宅洋館は木造二階建、瓦葺きで、建設時の文書より明治 10 年に建設されたことが明らかである。正面に玄関ポーチと二階にベランダを備えた、洋風建築らしい特徴ある外観である。一階は二室よりなり、待合や薬局、応接に使用された。二階は一室で、正面側にベランダを設ける。洋館の開き戸にはペンキで木目を描いた木目塗りの痕跡が残っており、明治前期の擬洋風建築らしい特徴を見せる。診察棟は、木造平屋建、瓦葺きで、洋館の西側に接続する。洋館と同じ明治 10 年の建設と考えられる。洋館とは一変して完全な和風建築で、二室の続き間座敷が東西に並び、東が診察室、西が内診室であった。

座敷は木造平屋建、瓦葺きで、診察棟の北西に接続して建つ数寄屋（すきや）の座敷である。座敷の建築年代は襖の絵師の年代観より天保年間（1830－1844）と推定される。明治 14 年（1881）に郭家に移築されたことが文書より判明する。なお、陸奥宗光の生家である伊達家から移築したものと伝えるが文書では確認出来ない。南北に二室を並べ、網代天井や凝った組子の障子を用いた濃厚な茶席の意匠に満ちた建物で、北西には茶室を備え、見応えのある数寄屋空間を有している。

離れは木造二階建、瓦葺きで、西側の廊下で座敷に繋がる。建設年は文書資料より明治 24 年（1891）である。一階二階ともに、一室よりなる小規模な座敷である。

この他、屋敷には米蔵、東土蔵、南土蔵といった、米や家財を収納する蔵が建ち、他には風呂や外

便所が建つ。屋敷正面にはセメント造に青石を貼り付けた表門及び石塀が建ち、屋敷構えを整えている。

郭家住宅洋館は、文明開花期でまだ珍しかった洋風建築に挑んだ当時の建築職人たちの技量がいかに発揮されており、その完成度が高い。また座敷の茶席趣味にあふれた数寄屋意匠も見応えがある。これらの建築は、医師であり文化人であった郭百輔の意向や趣味が反映されたもので、近代和歌山に営まれた民間医院の建造物として貴重である。特に洋館の建設年代は、全国に現存する擬洋風建築の中でも古いグループに入るとともに、文書により建設時の様相が判明することも文化財としての価値を高めている。



屋敷正面より見た洋館



洋館 1 階内部



洋館 2 階ベランダ



座敷九畳の間

- 1 種別（区分） 有形文化財（建造物）
- 2 名称（員数） 金剛峯寺 9 棟  
御影堂、西塔、山王院拝殿、山王院鐘楼、准胝堂、宝蔵、大会堂、愛染堂、  
三昧堂  
附指定：指図 4 枚、棟札 4 枚
- 3 所有者 宗教法人 金剛峯寺
- 4 所在の場所 伊都郡高野町大字高野山 152 番地
- 5 指定年月日 令和 6 年 12 月 9 日

（説 明）

高野山は和歌山県北東部の山々に囲まれた盆地上に位置し、弘仁 7 年（816）に弘法大師空海によって真言密教の根本道場として開かれた、日本を代表する宗教的聖地の一つである。高野山全域が金剛峯寺の境内地であり、その中心となる伽藍は「壇上伽藍」と称され、墓域である奥之院とともに山内の二大聖域となり信仰を集めている。今回重要文化財に指定されることになった金剛峯寺 9 棟は、後述の金堂及び根本大塔とともに、壇上伽藍を構成する堂塔である。9 棟はいずれも幾度もの火災に見舞われながら復興を繰り返し、現存のものは江戸時代末期から明治時代前期にかけて再建された建造物となる。

壇上伽藍は東西に長く取られた敷地に、中心部南端に中門が建つ。中門をくぐると北に金堂、根本大塔や御影堂などが建ち並び伽藍の中核を成す。

御影堂は、金堂の北西に建つ弘法大師の御影を祀る仏堂で、奥之院御廟と並ぶ高野山の最聖域となる建造物である。嘉永元年（1848）に建設された緩やかな桧皮葺き屋根の優美な仏堂で、多くの飾金具や漆を用いて荘厳され、桧の良材を駆使し優れた意匠でまとめた極めて質の高い建造物になる。

西塔は根本大塔と対をなす壇上伽藍の北西に建つ塔で、天保 5 年（1834）に再建された。国内有数の規模を誇る大型の五間多宝塔で、屋根は瓦型銅板葺きとし内陣は華麗に彩色されている。

山王院は壇上伽藍の西端に位置し、地主神である高野明神や丹生明神を本殿に祀る。その本殿を礼拝するための山王院拝殿や山王院鐘楼のほか、伽藍に建ち並ぶ准胝堂、大会堂、愛染堂、三昧堂の諸堂も、桧皮葺き屋根で高野山の伝統形式を継承するとともに意匠も優れた建造物群になる。

宝蔵は御影堂の北側に建つ寺宝を収蔵する蔵で、御影堂と同時期に建設された。土蔵造、漆喰塗り、銅板葺き屋根で、桧の良材を用いた蔵である。

上記の建造物のほか関連する図面や棟札が附指定となり併せて保護が図られる。

これら金剛峯寺 9 棟は、近世末期の成熟した寺院建設技術のもと高野山の中心伽藍にふさわしい格式を備えた建造物群として再興されたものであり、高い歴史的価値を有するとともに長い歴史を誇る伽藍の往時の姿を良く伝えている。





御影堂



西塔



山王院拜殿



准胝堂



大会堂



宝蔵

## 金剛峯寺金堂及び根本大塔

- 1 種別（区分） 有形文化財（建造物）
  - 2 名称（員数） 金剛峯寺金堂及び根本大塔 2 棟  
金堂、根本大塔  
附指定：棟札 2 枚、図面 27 枚
  - 3 所有者 宗教法人 金剛峯寺
  - 4 所在の場所 伊都郡高野町大字高野山 152 番地
  - 5 指定年月日 令和 6 年 12 月 9 日
- （説 明）

金剛峯寺金堂及び根本大塔は、前掲の金剛峯寺 9 棟とともに、壇上伽藍に建つ主要な堂塔である。このうち金堂は、高野山一山の総本堂として使われてきた建造物で、現在に至るまで高野山の重要な行事が修されている。幾度もの火災に見舞われながら建て直されてきたもので、現存する金堂は昭和 7 年（1932）の再建である。根本大塔は、真言密教世界を具現する高野山の象徴となる大塔で、金堂同様に何度かの焼失の後、現在の根本大塔は昭和 12 年（1937）に再建された。

金堂及び根本大塔の再建は、昭和 9 年（1934）の弘法大師千百年御遠忌<sup>ごおんき</sup>を記念した主要事業の一つであった。設計は京都帝国大学の建築家・武田五一（1872－1938）と同大学の建築史家・天沼俊一<sup>あまぬま</sup>（1876－1947）によるもので、意匠は伝統形式にのっとりながらも、耐震・耐火性能の獲得も目標とされた。そのため、鉄骨鉄筋コンクリート造と木造の混構造が採用されている点に特徴があり、当時最新の建設技術のもとに建設された。

金堂は間口 30m、奥行 24mの大型の仏堂で、屋根は瓦型銅板葺きである。鉄筋コンクリート造の構造体に木材を貼り付け、あたかも純木造のように見せて造られている。内部は中央に漆塗り板敷きの内陣を取り、周囲に畳敷きの外陣がめぐる。内陣は天井の高い壮麗な空間となり、高野山の総本堂たる高い格式を示す。

根本大塔は間口 23m、高さ 48mの五間多宝塔で、屋根は瓦型銅板葺きである。下層は四角形平面、上層は円形平面に造り、下層の中央に丸柱で囲まれた八角形の仏壇を設え、大日如来を祀る。外まわりは全て木造とし、伝統的工法によって造られているが、主体部は鉄骨鉄筋コンクリート造として、構造上木造の部分はこれに寄り添うように構成される。これには先行した金堂の建設技術が活かされている。金堂は天沼により古代や中世寺院の細部様式が引用され創作的な意匠で設計されたが、これと異なり根本大塔は礎石や文献調査により史実に基づく「復元」を目指した点に特徴がある。戦後に各地で寺院や城郭が復元されるが、その先駆的な例となる。

上記 2 棟の建造物のほか、関連する図面や棟札が附指定となり併せて保護が図られる。

金剛峯寺金堂及び根本大塔は昭和前期に建設された鉄骨鉄筋コンクリート造と木造の混構造の堂塔である。日本近代における大型寺院建築の到達点の一つを示す建造物として高い歴史的価値を有している。





金堂外観



金堂内陣



根本大塔外観



根本大塔内陣